

日本とサイパンの今後の交流を考える

2007年9月

国際交流学科 3年 内藤 恵



サイパンは、北マリアナ諸島の一つであり、第二次世界大戦後、アメリカ信託統治領だったが、1986年にアメリカの自治領となった。そのため、通貨も言語も基本はアメリカと一緒にある。日本から飛行機で2～3時間と言う近さで簡単に常夏のリゾートを楽しめるので、日本人観光客も多い。

私たちの研修の目的は、観光地でないサイパンを知ることだ。戦前のサイパンは日本の委任統治領だったので、多くの日本人が住んでいた。その名残の建物を見学し、日本語を話せたり、日本風の名前を持つお年寄りに人にも会った。また、日米戦争において激しい戦地であったこともあり、島のあちらこちらに戦争中使われた日本軍の基地の跡地や戦備品が野ざらして放置されたままになっている状態も見学した。

今回の研修で私が強く思ったのは、中途半端に残されたままの戦跡をどうすべきかと言うこととだ。特にサイパンへの外人観光客の約8割が日本人と言う状況を考えるに、

日米戦争で多くの命が失われたこの島で、日本人として、あるいは観光客として、どのような振る舞いをすれば良いのかということだった。



旧海軍灯台跡— 無残なイタズラ書きを地元 NGO が白ペンキで消したばかりだった。

現在のサイパンでは、過去に関する記憶の再現保存方法に関して、アメリカの圧力は弱まってきたため、日本統治時代および日米戦争の跡を保存し、博物館などを作って残そうという動きが生まれている。しかし、サイパン政府の財政難のため、史跡戦跡の保存が難しいという。日本統治時代、サイパンに砂糖キビ畑と製糖工場を作った松江春次を記念して造られたシュガー・キング・パークは、日本企業の援助によって整備された。その一方で、旧日本軍弾薬庫跡、戦車、機関砲の残骸、そして空襲によって全壊、半壊した日本統治時代の建造物などは、雑草が生い茂る中に見るも無残な形で残っている。Northern Marianas Collage で講義を受けたとき、McPhetres 先生は 島に残る神社の修理のために 日本の神社や神道関係団体の援助があってもいいと思うが そうした援助の申し出が全くというほどないと残念がっていた。日本の過去の統治が

残したものが、現在のサイパンの景観邪魔をしているとすれば、修復、保護、撤去などに協力して、過去の責任をとる必要があるだろう。

サイパンと言えばショッピングとマリン・レジャーというイメージがある。日本のマスコミももっぱらレジャー重視の記事や特集を組む。しかし、サイパンには戦争時代の悲しい思い出があることを忘れてはならない。私たちは、米軍上陸に始まった日米戦争で命を失った人たちのことを思いながら、ビーチ清掃に参加したり、バンザイ・クリフやスーサイド・クリフの崖の上で、ここから飛び降りて絶命した人びとのことを常に考えた。しかしサイパンの過去に無知な観光客は、ビーチでBBQをしてごみを捨てて帰っていったり、バンザイ・クリフの絶景をバックにピース・サインをして写真を撮ったりする。現地の人々や亡くなった方に申し訳ない。私は、今回訪問した数え切れないお墓、記念碑、慰霊碑、そしてそこに飾られていた千羽鶴、花束などに、亡くなった方の存在を見た。もう二度と戦争は起こしてはいけないと改めて強く思った。そして、後世にも平和を訴えていかなければならないと思った。サイパン戦とは、日米合わせて7万人（日本兵4万3千人、日本人民間人1万3千人、米兵1万4千人）が命を失うという壮絶な悲劇であった。しかし歴史を繰り返さないためにも、観光客はそうした惨劇から目をそらさず、またサイパンの人々も、そうした悲劇をありのままに全世界の人々に訴えていって欲しいと思った。

私は、サイパンに楽しい観光をしに行くのが悪いとはいわない。外国人観光客がサイパン経済に多大な影響を与えているのは明白だ。ただ、日本観光客の場合、レジャーを楽しむだけでなく、サイパンの歴史を知って、この地で何かを感じてもらいたいと思った。個人旅行では難しいかもしれないが、環境保全のボランティアに参加してみたり、現地の人たちと触れ合える行事に参加することは良い経験になる。そうすることで一步踏み込んだサイパンを感じる事が出来るからだ。

私たちは今回の研修で、戦時中に日本による教育を受けたお年寄りたちや未だに日本

家屋に住むおばあさんに会った。彼等の多くがサイパンの先住民族のチャモロ人やカナカ人で、戦時中は一番被害を被っただろう人々なのに、彼らは日本の統治時代を懐かしみ、日本人である私たちを温かく迎えて、戦時中の話しをしてくれたり日本語の歌を歌ったりしてくれた。また、サイパン在住の日本人も多く、ガラパンの街に行くと普通に日本語を話す店員もたくさんいて、サイパンと日本の距離の近さも感じた。同時に、日本からサイパンまたは北マリアナ連邦の大学に留学（特に語学留学）する人があまり多そうでないこと、またサイパン出身者が、日本に留学、滞在している例をあまり聞かないことも気になった。サイパンと日本の交流を考えるとそういった人が増えても良いと思う。



旧日本海軍司令部跡を守る米子さんとお孫さん

最後に、今回の私たちの旅行をコーディネートしてくださったパシフィック・イーグル・エンタープライズ社を紹介する。社長のウィリー松本さんと、奥様の松本綾子さんは、事前勉強を行なった私たちがあれこれと見たいもの、体験したいものをリクエストしたところ、そういった希望を叶えてくれる最善のスケジュールを組んでくださった。しかも島内を廻るためのマイクロ・バスの手配、実際の案内に加え、運転手などとして

いただき、何から何までお世話になった。今回、北マリアナ大学、マナムコ敬老コミュニティ、北マリアナ連邦観光局などを訪問したり、地元 NGO と一緒にビーチ清掃をしたりして、現地の方々と触れ合って、生の声を聞くことができたのは、全て松本夫妻のおかげである。さらに、北マリアナ連邦政府知事 Benigno Repeki Fitiaf 氏、北マリアナ連邦政府下院議員 Cinta Kaipat 氏 などの VIP に会うことができたのも、地元の新聞 Daily Marianas Variety に私たちの研修の様子を写真入りで載せていただけのも、全て松本夫妻のご配慮のおかげだ。パシフィック・イーグル社は、サイパンにおいて日本とサイパンの架け橋となっている。もし、サイパン旅行を単なる観光旅行で終わらせたくなかったら、パシフィック・イーグル社に問い合わせることをすすめる。



スーサイド・クリフのくぼみと崖下の茂み



極楽谷旧日本軍野戦病院跡入り口